

第1章

概要

原 順子

(1) 目的

グローバル拠点は「仮説Ⅲ－国内外にグローバル拠点を形成し、効果的に活用することにより、自らの考えを適切な方法で論理的に他者に表現し、勇気と判断力を身につけることができる。」という仮説に基づいて計画、実践している。5年次の目的は、次年度から自走して続けるにはどのように実施すべきか、これまでの活動を精査し、特に経費の面で検討しながら進めることである。

(2) 実践方法

拠点の活動や国際交流、グローバルな課題を探求するため、これらに興味を持つ生徒が「グローバルコミッティ」を形成し、授業後に不定期で活動をしている。今年度は特にSDGsに興味関心を持つ生徒が多く集まった。海外研修に参加しない生徒も登録して校内外のイベントに参加している。各拠点の中ではグループ研究が多い。授業後に専用の教室はないので、図書館や各学年の持つ多目的教室で、SGHのパソコンを使いながら活動をしている。フィールドワークやアンケート調査をする場合は、開発単位Ⅰと同様、SGH推進委員会の指導で実施している。

Global Comittee2019登録者数

モンゴル	27
ノースカロライナ	40
リトアニア	47
Global Discussion	36
He for She	35
その他 (ALE等)	52

登録生徒は高1、高2合わせて101人。

上記は複数拠点登録しているため延べ人数

(3) 内容

拠点		目的・テーマ
国内	名古屋大学	2030年の社会～SDGs 展望と課題～
海外	アジア/モンゴル	モンゴルの草原と都市で「自然と環境」について探究する
	北米/ノースカロライナ	主に「人権と共生」「文化」探究を通して日米の価値観を理解する
	欧州/リトアニア	杉原千畝を核として「平和」「生命」を探究する

(4) 検証評価

5年間で拠点の認知度が高まり、予め自分のテーマを持って拠点に参加する生徒が増えた。海外に興味を持ち、入学してくる生徒もいる。拠点で最も希望者が多いのがリトアニア、次いでノースカロライナである。理由を聞くと、自分の興味と結びやすいことに加えて、時期が年度末で区切りが良い、部活動の試合がないことをあげる。モンゴルは部活動の大会時期と重なり、TV会議に参加していても現地に行けない生徒が毎年いる。9月新学期の研修先の学校と、日本の学校歴が異なるので、協同で探究活動できる時期が限られ、現在に至っている。しかし、相手校も協同探究に意欲的に色々提案して頂けるので、今後も互いに調整しながら続けていきたい。国内拠点の名古屋大学からも、グローバル・ディスカッションに留まらず、単発のイベントに参加させてもらい、留学生とのディスカッションや、プレゼン発表の機会を得て、生徒の啓発に役立っている。

(文責 原 順子)